

富山県立南砺福野高等学校 一年

# 「違いなんでない」

まっ  
井  
彩  
吹  
ぶき

中学生の夏休み。祖母と買い物に出かけたときだった。前日に練習試合があり疲れが溜っていたので、私は祖母に近くにあるイスのところで待っていると聞いた。

「ねえねえそこのお嬢ちゃん。目が突然見えなくなったらどうする？」

と、突然隣に座っていた七十代くらいのおばあさんに話しかけられた。急に話しかけられた驚きと、問いかけられた問題の重みの驚きとで頭の中が混乱した。私はすぐに言葉を返すことができなかった。おばあさんはそんな私をおかまいなしでまた私に問いかけた。

「障害のある人に偏見はあるかい？障害があることは悪いことなのかい？」

と。おばあさんの声は少し震えていて、どこか悲しそうだった。

「私は、障害に偏見もないし悪いことでもないと思います。」

だって誰も障害を持ちたくて持っているわけじゃないじゃないですか。でも、目が突然見えなくなったら障害者になったのかとショックを受けると思います。」

そうおばあさんに言った。自分が言っていることは、矛盾しているかわかっている。偏見がないと言っておきながら、障害者になってしまったらショックだ、健常者ではなく障害者のくくりに入れられるのが嫌だと。おばあさんは、私の手をにぎりたかったのか、私に手を出してと言ってきた。私はそんなの目で見てにぎればいいじゃないかと思いき、おばあさんの方に目を向けた。すると、

「ごめんねお嬢ちゃん。私失明しとるんやちゃ。なにも見えないし、光もわからん。」

私はとても驚いた。最初に話しかけられたときと違う驚き。おばあさんは目が見えていない。全く気づかなかった。おばあさんはずっと優しい笑顔を浮かべていたし、目元のシワが

多く目がよく見えなかったからだ。おばあさんは、手をにぎる力を強め、目が見えなくなった経緯を教えてくれた。おばあさんは、中学生の頃に目の病気を患い高校生のときに両目を失明したらしい。目が見えないことが原因で思い通りに生活できないし、いやがらせをたくさんされ、最悪の選択をしようとしたこともあると。私は、おばあさんが目が見えないというだけなのに、いやがらせを受ける理由がわからなかった。何も悪いことをしていないし、障害を持ちたくて持ったわけでもないのに。社会から拒否される存在になるのか、必要な存在扱いはされるのか。なぜ、みんなそうするのか、どう考えてもわからなかった。私の肩にそつとおばあさんは手をのせてきて、静かに言った。

「障害者は、どんくさい。何もできない。社会にいと、邪魔なだけ。普通の人と違う、ヘンな人だ。そういう固定概念がずっとあるからね。障害っていうからね。害っていうイメージが抜けないんだよ。」

私は、すごく悲しくなった。障害者にも心があるのに。目が見えなくても、耳は聞こえるし、話すことだってできる。耳が聞こえなくても、目は見えるし、手話や筆談でコミュニケーションをとることもできる。体を動かすこともできる。体が不自由な人でもできることは必ずある。そう考えると健

常者と全然変わらないと思う。おばあさんは、ゴソゴソと荷物を整理し、私の方を向いて言った。

「お嬢ちゃんと話せて良かったわ。ありがとう。障害者と健常者との差が縮まる日が来るのは、まだまだだね。私たちには、人の力が必要な。健常者だって一緒なんや。小さな気づかいでいいから障害者に優しく接してあげて。その気づかいに救われるんや。」

そう言い残して杖をついて歩いて行った。おばあさんと話して、障害ということを初めて深く考えた。いろんな気づきがあった。障害者も健常者もどちらも変わらない。人の力がないと生きていけない。障害者は、自分でできることが少し少ないだけ。心もある。コミュニケーションもとれるから、思いを伝えることができる。みんなちゃんと向き合っていないだけ。固定概念があるだけ。だから、少しでも障害のある人となない人の距離を近づけられるように、自分ができるとことをしたい。